

国土交通

2011.4—2011.5

特集
「三地域居住」
というライフスタイル

NO. 108



「自然の中で暮らしたい」、「休日は田舎で趣味をしながら過ごしたい」など、複数の地域で多様な生活を楽しむ。それが“二地域居住”という新しいライフスタイルです。受け入れ側である各地方自治体では、その土地の魅力を伝えるとともにサポート体制を整えています。今回、実際に二地域居住をしている方のお話に加え、福島県・山梨県・北海道の取り組みをご紹介します。

平成二十三年三月
編集部一回

日本の気象観測史上、経験したことのない地震と津波に襲われたあの日、信じがたいテレビの映像に世界中が声を失いました。大切な人を失った深い悲しみの中ではどんな慰めの言葉も意味のないものかもしれません、被災されたみなさまに心よりお見舞い申し上げます。

今回、現場力の取材で訪れた岩手県大船渡にある「気象庁大気環境観測所」もこの地震で建物や機器が破壊され、現在観測不能となっております。幸い職員は一命を取りとめ、一日も早く観測を再開するべく復旧作業にあたっております。

また、「二地域居住」のルポにもあります福島県においては、今回の地震と津波が引き起こした原子力事故に対して、関係者によるまさに命がけの作業が繰り返されていきます。

特集

ルポ 福島県 04

ルポ 山梨県 07

自治体とNPOが両輪となって移住促進

北海道—充実のサポート体制で
ちよつと暮らし

業務密着 ルボシシリーズ _____

現場力	12
-----	----

File 9 氣象局：大氣環境觀測所

シリーズ探訪・探究 _____

訪れたいまち 16

國史館藏金史大略

MLIT 歴史アーカイブス _____

日本の灯台 140 年のあゆみ 18

教えて国土交通省！ 20

はれるんのお天気教室 21

記者席から 22

MLIT NAVI 23

国土交通

2011.4—2011.5

●平成23年3月発行 No.06（隔年発行）
●編集発行／国土交通省 入国管理局移民課
〒100-8392 東京都千代田区霞が関2-1-3 TEL 03-6253-9111（代表）
ホームページ <http://www.tlbg.jp/>
●編集協力 株式会社Tフーズ・イン・ミュージケーションズ

本書の再版で、念のため述べた部分については、執筆者の個人的見解であることをご留意ください。また、本書の解説の「後記」欄にも触れます。



表紙

懐しい熊本での生活から始め、今日に行くとなぜかほへとする国民がある。
 白い髪、黒い瞳のさぐずり、器用な宮城——、日 今昔のしの記憶も、あつたそ
 した時々のなかで感じるもの、女らしさもない。(写真は山梨県で、川口戸
 をする松本さん、子からの人ともあわせてごらんください)



福島県
裏磐梯の古民家で至福の時を過ごす

湖のほとりに佇む市民家

岩崎哲次さん(63歳)が春から秋までの3シーズンを通こす福島県山北塩原村には、わずかに表磐梯の古民家2階には、わずかに表磐梯の古民家2階には、まさに男の隠れ家」といった趣の書斎には、古民家に手を入れたにあたって、2つの窓を新しく開けた。座椅子にとっかかり腰を下ろすと、正面の窓からはすぐ近くの桧原湖を、背面の窓からは、表を通る街道の先に中景の山を望む。

松原海のほとり、街道沿いに広がる集落のとは、川近くにあるこの古民家は、築90年と言われる。1階と2階を合わせると、ゆうに10室を超える大きさ。屋根や外壁・

建具の一部はすでに金眞製のものに取り替え済みだが、土間をはじめ、四角裏を切った板の間や畳の間、室内の建具には、古民家ならではの魅力があふれる。

を1階で居て、11時から売り切れたまでそば屋を営む。屋号は「蕎麦古屋(そばこや)」。地元産のそば粉十割の、つなぎを用いない手打ち麺が売り物だ。開店前には、1日20〜30食分のそばを口う打って、準備を整える。冬を過ごす千葉県市原市の自宅敷地内には、そば打ちの小屋を建てたばかりの趣味人。開店にあたっては、福島県安達町市内の70才になる旧来の友達であるそば職人から指導を受けた。

冬場は下葉で暮らす

この日は、平日にしては客の入りはまずまずなのか、用意した20食分のそばはほとんどは残っていき、岩佐さんは作務衣姿で、調理場と客を迎え入れる間が裏の間とでいったり米たり。囲炉裏の周りでそばを食べてもらって、会話を楽しみながらいい時間を過ごしてもらおう——それが、岩佐さんの願いでもある。

い。地元産のそば粉は仕入れが限られていたこともあって、そば屋の営業日は年間125、130日、休業日にはなををして過ごすのかを問うと、「イワナ釣りや山菜採りですけれど、悠々白濁の様子。若いころから山好きで、名刺に「耶麻親爺」を名乗るお佐さんにとつて、近くの山で過ごす時間はなによりよかったです。

至福の時を過ごせるとはいえ、11月半ばになるとこの地を離れて千葉で暮らす家族のもとに愛車を駆る。「口分の力で建てて、3人の子どもが育った家だけに、愛車がありませんから」と岩佐さん。月に一度、除雪作業などに戻るものの冬は千葉で過ごす。

になった。そば粉はいま、複数の農家から直接仕入れる。

原産地産地解消組合。理事長は、松地元で立ち上げた組合と、佐佐木さん宅の隣に住む佐藤正義さんが務める。佐藤さんは岩佐さんに対する地元への反感をこう明かす。「古民家にどんな人がやって来るのか、私たちとしては気にしていないです。結核として、いい人で良かった。ここでも商売してもらったら迷いはない。『私たちにとっては、生まれた時からあるありふれた食べ物でそれほど思い入れはなかったのですが、岩佐さんの打つそばが大人気になったことで、私たちのそばがこんなに評価されるんだ」ということに改めて気付いたんです。

岩佐さんがこの地で過ごすようになったことは、地域の活性化にも結び付きつつある。

同じように二地域居住を始めてみたという人に向けて、岩佐さんはこうアドバイスする。一心の豊かな生活を送るという理想を案現できるのが二地域居住です。戻る場所があるのだから、安心して踏み切つていいと思います。自分の世界や人とのつながりを大切に生きていることに没頭するのが、成功の秘訣です。事前に緻密に考えすぎることなく、走りながら考えていきましょう」。



決め手はインスピレーション

岩佐さんが炭鑿梯のこの古民家を購入したのは、10年ほど前、53歳の時。さかのぼること6年ほど前から、釣り用のベアスキヤンプにしよう、ともともとどこがれていた古民家を探していた。

会津在住の知人からの紹介でこの古民家に出会った。6年間にわたって探し続けてきた経験が下地となったのか、決め手はインスピレーションだったという。

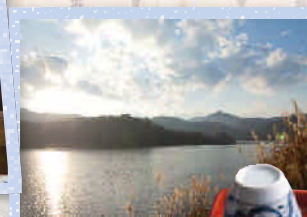
快適に過ごせるように、そして
白分流のものになるように、購入
した占民家にはプロの力も借りつ
つ手を入れていった。そして、57
歳の時、転機を迎える

当時、駅ビル管理運営会社で役員を務めていた。「ここが潮時」とばかりに、定年を前に長いサラリーマン生活に別れを告げ、ひと足早くに会社を辞めて、第2の人

地域活性化のきっかけに

牛を裏譬梯の自然に囲まれて過ごすことを決めた。

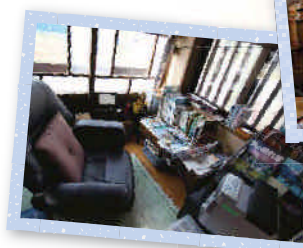
当初は、自然の中で遊んで過ごしていた。そのうち、人との出会いを求めて、なにかを起業しようと思ひ立つて、4年前、近所の人にちの経験はあった。一般には知られていないが、北塩原村では昔から良質のそば粉が作られていた。しかし、その量は少なくてすべて家用で食すのみだった。その存在を知った岩佐さんは当初、そうしたそば粉を分けてもらって打って食べた。ところが、次第にそばの人氣が出てきたことから、地元では2年前、組合組織を立ち上げて、休耕地をそば畑に生まれ変わらせ、の取り組みにまで手を着けるよう



古民家のそばに広がる松原池
冬は氷結した湖上でワカサギ
釣りが楽しめる



「最初はどんな人なのか気になりましたが、その人柄にふれ、いまでは会話に笑いが絶えません」と佐藤さん(左)。



2階にある3畳ほどのこゑ。好きなものに囲まれながら
景色を楽しめる、とっておきの空間が



お客様との会話を楽しみ岩佐さん。
東京側だけでなく、仙台や新潟からも
日帰りでお会いに来るそうだ。



片の休業日には、イワノ釣りなどで自由な時間を満喫している

「素で現役として活躍して
いた頃の岩佐さん」

「奥・髯・髭・ひげら髯・髭・髯」の銘で商品化されたそば粉。インターネットや新聞記事にも取り上げられ、注文が増えている。「奥・髯・髭」とは、谷原潮最奥のこの地の魅力を広めたいと佐佐さんが願いを込めて名付けたもの。

「ほっとする、ふくしま」に住んでみませんか？ 福島県

ふくしま・ふるさとUIターン

福島県には、「地域居住に興味を持つ方々のためのさまざまなアクセス方法があります。実際に現地で宿泊できるものから、東京や大阪にある窓口を利用する方法など、ニーズに合わせて選択できます。また、総合的なアクセス窓口としては、右記があります。

〒960-8670 福島市移住町2-16
福島県 観光交流局 観光交流課
TEL 024-521-7287 (直通) FAX 024-521-7888
http://www.pref.fukushima.jp/fui/index.html

1. ふくしま暮らし体験施設

福島県内には、「地域居住UIターン希望者が現地で暮らしを体験できる生活体験施設が各地で整備されています。

廃校の校舎を再利用したもの、築100年余の古民家を改修したもの、コテージとして新築されたものなど、バリエーションに富んだ施設があります。

【奥会津 のんびり館】

町の中心部にある空き家（旧旅館）を、地元木材を使い改修した伝統的建築様式。町内や、UIターン希望者ののんびり過ごすのに最適な場所。
（1）無休、1泊2日（2食）7,000円（基本料金）、体験料金、000円〜



2. ふくしまファンクラブ

ふくしまファンクラブは、福島県民になる人への登録制クラブ（会費無料）。

会員登録すると、会員証と白河ミミなるものが進呈され、福島県民の話題を満載した会報誌が年4回届きます。

また、様々なスタイルの福島県民の着付けや、提案したり、抽選によるおたのしみプレゼントなども。さらに、県内各地の協賛店で割引や特典などの会員サービスを受けることができます。



3. ふくしまふるさと暮らし情報センター

ふくしまふるさと暮らし情報センターは、福島県がNPO法人ふるさと回帰支援センターに委託し開設している、定住・地域居住に対する総合窓口です。

場所は、東銀座駅5番1出口から、歌謡座のそばに七十七ビル3階、ふるさと暮らし情報センター内にあります。専門の相談員を置き、福島への定住・地域居住を考えている方に、face to faceでの細かいお問い合わせを提供しています。

相談受付	月曜日から土曜日まで（午前10時から午後6時まで） （祝日及び10月13日～16日、12月29日～1月3日を除く）
連絡先	電話 03-3543-0333 FAX 03-3543-0346
住所	〒104-0061 東京都中央区銀座4-14-11七十七ビル3F NPOふるさと回帰支援センター「ふるさと暮らし情報センター」内

4. ふるさと暮らしセミナー

ふるさと暮らしセミナーは、福島県内の市町村担当者などが首都圏に川向き、市町村での暮らし方を紹介するセミナーです。電話やメールではなかなか聞くことのできない生の話を聞くことができます。現地に行きたくてもなかなか時間がなくて...という人には、うってつけ。

今後の開催予定などは下記URLから
http://www.pref.fukushima.jp/fui/seminar.html



写真は過去に開催されたセミナーの様子

「住んでみて良かった」
福島県民見



地味だと言われる福島県ですが、近年変化が起こりつつあります。田舎暮らし専門誌「山梨暮らし」の本読者アンケートでも住みたい県の上位に選ばれているようになりました。

自治体や様々なセクターの努力の結果とも言えますが、実は心強い応援があります。首都圏とのアクセスの良さ、安定した地盤、土地の安さ、大らかな県民性など、私たちが普段、意識していないチャームポイントを、既に移住されている方が口コミで伝えて下さっているのです。これはまさに、地元民である私たちに気付かせてくれた「福島再発見」で、県全体のイメージアップにも良い影響を与えてくれるのです。

今後も、定住・二地域居住をお考えの皆さんに、住んでみて良かったと思っ頂けるように充実した受入体制を進めたいと考えております。

ル
山梨県
ポ

自治体とNPOが両輪となつて移住促進

移住希望者に空き家を紹介

新宿駅から特急で1時間半の距離にある山梨市では、地元のみならず、NPOとともに、空き家への移住促進に取り組む。

空き家の提供者と移住希望者とを結び付けるのは、市で運営する空き家バンク制度だ。過疎対策の観点から、平成18年9月に立ち上げた。空き家を売りたい・貸したい人を市で募って、現地を確認したうえで情報を公開する。一方で、

利用登録を済ませた人を対象に随時、新しい物件情報を郵便やメールで送るほか、毎週金曜日には現地案内を実施する。双方の条件が合えば、契約に至るまでの交渉や契約実務を、提携する山梨県地建物取引業協会の会員社が担当する仕組みだ。

平成22年12月現在、売買・賃貸借契約に至った件数は50件、制度を担当する山梨市市民生活課の平

野宗則さんは、前担当者が確立したシステムの成果と語る。

契約別では、売買20件・賃貸借30件。「利用登録者の中では賃借希望が全体の6割近くまで増えてきました。空き家の価格が500万〜1000万円程度なら購入を考えます、それを越えたら、まず実際に暮らしてみよう」と、賃借に対する意向が強まっています（平野さん）。

移住してもらう前にまず山梨市に来てもらおう、という趣旨で交流促進事業を展開するのは、地元で組織するまちづくりNPO、山梨ガバメント協会だ。平成18年4月の立ち上げ以来、田舎暮らしの体験ツアーや移住希望者対象の相談事業などを、市とNPOが連携して実施してきた。迅速な対応や豊富なアイデアなど、民間ならではの利点を生かして行政との連携を図る。

自宅は神奈川、川舎が山梨

平成20年7月から、市内の集落内にある借家と神奈川県相模原市内の持ち家との間を行き来する松木さん（70歳）は、移住促進策の柱となる空き家バンクの利用者だ。



炭焼き普及チームのメンバー、白川潤平さん（右）。松木さんとともに炭の運びや、林から材料を集め、炭焼きを行っている



市営の炭焼き窯を利用し炭焼きを行う松木さん。管理する畑の木を伐採して炭焼きしたのを、かき、炭焼き普及チームを立ち上げ活動している



松木さんの山梨のお住まい。このお宅は2年目で、空き家バンクを利用した1軒目が二軒になったため、もっと近い県を越え近所の方の紹介で引っ越したそうだ



民間

「新たな公共」として、地域活性化を目指します

まちづくりNPOから

地域活性化を目的に、地元仲間十数人とともに立ち上げたNPO法人です。「新たな公共」として、行政の役割を一部肩代わりできないか、と考えています。行政ではだれもが納得できる理屈を求めるあまり物事が進みにくくなる面が否めません。民間ならではの良さを生かして、事業を展開していきます。

具体的には、田舎暮らしを体験してもらう事業やWebサイト上で移住希望者の相談に応える事業など、交流や定住を促進する事業に取り組んでいます。ホームページには、行政に先駆けて英語版を作成し、今後は韓国語版も用意する予定です。

これらの事業を通じて、山梨市内に住んでみたい方々には、空き家バンクの存在を紹介しています。NPO法人で実施する田舎暮らしの体験事業は、空き家バンクの利用登録者にも案内してもらっています。行政とは車の両輪のような関係で、今後とも連携を図っていきたい、と思います。（談）



NPO法人山梨ガバメント協会理事長
磯村賢一さん

NPO法人山梨ガバメント協会ホームページ <http://www.yamanashi-ga.org/>

行政

空き家バンク担当から

まず現地を訪ねて、キーマンを見つけてください

成約に至った実績50件が多いが少ないかはともかく、これだけの方が山梨市内に移住されたことは事実です。市内への移住者が増えれば、いろいろな面で地域内の活性化につながります。人と人のつながりが新しく出来るのは、意義深いことです。

平成23年度からは、NPO法人とも連携を図りながら、コンシェルジュの登録制度を始める予定です。空き家バンクの利用者で2年以上定住している方を、山梨市を訪ねてきた方々にその良さを生の声で伝えるコンシェルジュ役として登録します。

思い描いていることが、その地域ですべて出来るとは限りません。移住する先を決めるときには、現地を訪ねたうえで、少し時間を掛けて結論を出してほしいですね。暮らし始めてから相談相手に出来そうなキーマンを見つけておくことも、ポイントです。地域交流のイベントは、そうしたキーマンを見つける場としても活用できるはずです。（談）

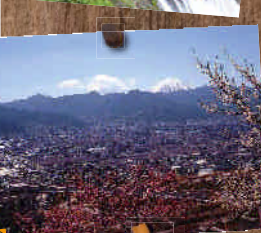


山梨市役所市民生活課
まちづくり・協働担当副主査
平野宗則さん

山梨市ホームページ <http://www.city.yamanashi.yamanashi.jp/>

空き家バンクについて <http://www.city.yamanashi.yamanashi.jp/gover/grapple/bank/>

View of Yamanashi City



1. 明治8年に県令藤村頼朝によって建築された牧丘郷土文化館（旧室伏学校校舎）。2. 原生林を流れる湊谷がいくつもの滝をなし、国内屈指の渓谷美を誇る西沢渓谷。3. 笛吹川フルーツ公園からは、富士山だけでなく春には眼下に桃の花畑が広がる。4. 新日本三大夜景の一つである笛吹川フルーツ公園の夜景

相模原の家で暮らすのは、正月の時期と自宅でも何か用事ができたときくらい。暮らしの基盤はもっぱら、この集落内の借家にある。もともとアウトドア派。スポーツも好き。長年勤めた外資系企業を36歳で早期退職して以来、自然に恵まれた土地での暮らしを模索していた。



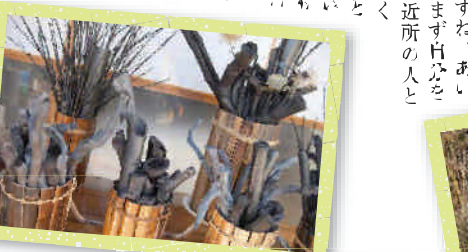
炭焼窯は、道の駅「花がけの郷」のそばにあり、かつては薪で焼く。今では薪ではなく、炭で焼く。1000キログラム以内という条件を満たす山梨市の空き家バンクに関する記事を書いた松木さんは、利用登録を済ませて、物件探しに乗り出した。

最初は買うつもりだったが、希望を満たす物件が見つからなかったか、賃貸物件もあるのを知って、方針を切り替えた。「地域に溶け込めるか、1年くらい実際に住んでみるのでもいい」。そう思い直した松木さんは、集落内の小ぶりな一軒家を借りた。

普段、松木さんは農作業や炭焼きなどで時を過ごす。近くの畑は、集落内の果物屋から紹介された。広さ約150坪、葛（くず）や笹で荒れていたのを、大根の耕運機を用いて整備し直した。大根や白菜など、多種多様な作物を育てる。農家が処分した困った果樹のせん定した枝などを材料に、試行錯誤を重ねて焼き方を体得してきた。炭焼きは初挑戦以来、20回近くになる。

松木さんは「炭焼きは環境にもいいんです。樹木を燃やしたり腐らせると二酸化炭素が発生しますが、炭にして、例えば土に埋めると土壌にも良く、二酸化炭素も発生することはないんです。出まわった炭をできるだけ多くの人に活用してもらってはどうか。活用方法も模索しながら取り組んでいます」と、炭焼きに力を入れている。

暮らしを営むという事は、周囲の人々とかかわりを持つということ。それだけに2地域居住を考えた人は、住む家を探すだけでなく、地域になじめるかどうかを感じ探ることも欠かせない。山梨市の空き家バンクとNPOの交流促進事業はまさに、この2つの必要に応えるもの。これら官民連携の取り組みが、移住促進につながっていく。



松木さんが自身で焼いた炭を使い作ったもの。ただの炭がアート作品に変わる。炭焼窯の裏面の山には「炭焼さん」と呼ばれるのが、足跡と昔の地名からきたもので、当時この地域では大きな石を利活用で、量産化されていた。松木さんたちが炭焼きを始めてから、木の伐採依頼や、材料提供者が次々と現れている。



お誕生日に家族から贈られたというお祝い。11歳の孫が描いたお祝い状が描かれている。



炭焼窯の裏面の山には「炭焼さん」と呼ばれるのが、足跡と昔の地名からきたもので、当時この地域では大きな石を利活用で、量産化されていた。

松木さんたちが炭焼きを始めてから、木の伐採依頼や、材料提供者が次々と現れている。

